

『ピキヨ』(翻訳)2
Nerval' Piquillo(translation)

藤田 衆 (名城大学 外国語学部)

FUJITA, Shu, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

Abstract

In the second act Mendoce comes to Sylvia to restitute her jewels. She reminds him that she rescued him in an accident. He remembers and show his love in his attitude but he can not explain her that Leonor is not his wife but sister. Piquillo, disguised, enters in Sylvia's house and tries to seduce her. She recognizes him as the thief of jewels and forces him to return them by introducing the Alcade. Don Fabrice kidnaps Leonor with aide of Piquillo and Mendoce comes to Sylvia to get explanation. Sylvia, having learned that Leonor is Mendoce's sister, confesses the kidnap project and swears Mendoce to take her back.

第2幕

シルヴィアの私室

第1場

【歌】

シルヴィア、侍女たち

合唱

ここでは、過ごせます
至福の日々を
悩み事も消えていきます
憂う心からも
波の残した跡が
消えていくように
時が飛び去る
捕まえなくちゃ
夢中になる気持ちも
所詮は束の間の欲望！
楽しみを追って
飛びゆくだけ
ここでは、過ごせます、以下繰り返し

シルヴィア

いいえ、いいえ、もうそんな浮ついた考えは沢山、
からかい好きの感情で気まぐれな考え、
もう私はそういう上辺だけ優しい

心から出ない言葉は言わないわ。ⁱ

ああ、心に何という声が芽生えるのかしら！
なんて心地よい調子が耳をとらえることか！
ええ、感じるわ、心の中に目覚める

力強い思い出が

あまりにも愛しいお姿が

戻って来た、避けていたのに

ああ、思わせぶりをしてみたのを

今日愛が罰するのだわ

でも何故に新たな悩みに身を任せて

安らぎも、自由の身も犠牲にするのか？

愛は私の苦しみなど馬鹿にするし

私の悩みなど笑い飛ばしてしまう。

気違い沙汰ね、

若くてきれいだというのに

今の私が

虜になるなんて

無防備なままに

やさしくなりすぎた心を

そんな面倒ごとに

新たな時間の一つ一つが

翼の先で触れて行き

こよなく美しい花でさえ

たちまちにして萎れさせてしまう

新たな日々の一つ一つを

足の先で消していき

私たちの道のどれかしら

甘い足跡が消えてしまう

気違い沙汰ね、以下繰り返し

第2場

シルヴィア、小間使い

【台詞】

小間使い

奥様、奥様！

シルヴィア

なあに？

小間使い

お話させていただきたいという騎士様がいらしています。

シルヴィア

お名前はおっしゃった？

小間使い

ドン・ディエゴ様です。

シルヴィア

急いでお通しして、すぐにね…ああ、心がドキドキする…馬鹿な私！

第3場

シルヴィア、マンドス

シルヴィア

騎士様、拙宅にいらっしゃるなんてなんて縁起が良いんでしょう。こちらから伺いますって申し上げたんですのに。お座りになりません？

マンドス

これはかたじけない！お預けになられたお宝をお返しに参上しました。（宝石箱を渡して）お持ちしたのは、これでございます。

シルヴィア

失礼いたします、ディエゴ様、でもこの箱ではございません。（箱に刻された紋章と冠を示して）私は侯爵夫人ではありません。（箱を開けて）私の宝石ではございませんよ。これはずっと素晴らしい、豪華な首飾りです…お家は素晴らしいお宝をお持ちですね、真珠をダイヤに変えるほどの。なさり方は新奇で、独創的で雅でいらっしゃるけれど、お受けするわけにはいきません。

マンドス

お間違えのようですが、奥様。これは贈り物ではなく替りの物なのです。

シルヴィア

とおっしゃいますと？

マンドス

あなたをお助けしたあの盗賊どもが、私があなたをお送りするために外に出たすきをつ

いて拙宅に侵入したのです。

シルヴィア

それで泥棒の被害に会われたのですか？

マンドス

ええ、それが私でなく、あなたのものが盗られてしまったのです。

シルヴィア

そのお話は全く信じられませんわ。私を襲った泥棒は町の反対側で目撃されたのですから。

マンドス

ですが、うけあって全く本当の話なのです。

シルヴィア

まあ、本当としておきましょう。でも命を失いそうになった女、あなたがお救い下さった女のところに来てなくなった宝石の話などするなど理に合わないとお思いになりませんか？ そんなことよりあなたのことをお話ししましょう。私の救い主であるあなたの。昨日の晩に起こったことをつらつら思いますに、これほど神様に感謝しなくてはならないことはないと思えますの。

マンドス

神様ですって！

シルヴィア

そうですとも。まさに必要な時に、私が森の真ん中で、若くて、勇敢で、一軒家に隠者のようにお暮しになっている殿方にお会いできるなんて神様のお計らいが必要だったんじゃないでしょうか？ セヴィーリャでは剣を持った隠者などめったにいませんし、およろしければ、あなたはそんな理屈に合わないダイヤの話、だってそう思われるでしょう、そんな話などよりもっとずっと興味深いことをお話になれるのじゃないかしら。例えばどんな事件があなたにセヴィーリャでブルゴスでお持ちになっていた名前をお忘れになられるように強いたのかお話を聞えませんか？

マンドス

まさか、ご存じなのですか？

シルヴィア

マンドス様は 6 か月前にブルゴスからバルセローナへの道をお通りになったことを覚えておいでかしら？

マンドス

ええ、それは。

シルヴィア

そしてサラゴッサから数里のところでお車がお壊れになったことを覚えておいでかしら？

マンドス

ええ、そうでした、私は頭を岩にぶつけて気を失っていたのです。

シルヴィア

お目覚めになったときは、ベッドの上に傷ついて横たわっておられた…

マンドス

目が開いたとき、まだ顔を覆っていたヴェールを通して一人の女性が見えたのです。私の上にかがみこんで、心配そうに私が蘇生するのをお待ちになっているかのように見えました。私は神のもとへと私を迎えるためにいらした天使だと思いました。手を差し伸べて起き上がろうとしたのですが、力がありません、もう一度気を失ってしまい、意識を取り戻した時にはその女性はもう傍にはいなかった。私は自分に何が起こったのか、どうしてここにいるのかを尋ね、そこにいた人にもよく分からなかった、ただ…

シルヴィア

その女性が道で瀕死のあなたに出会い、自分の車に救い上げて気絶したままトゥデラまで運んだのだと、そこで二昼夜彼女はあなたが蘇生するのを待った、それから、あなたが危機を脱したのを知って、名前を告げずに去ったのだ、と。

マンドス

それではあれはあなただったのですね、奥様。ああ、そうだ、そうだ！私の心は目が認めるより先にそれに気づいていた。あなたが私の前に現れたのは昨日が初めてではなかった、その優しい声が心の底まで震わせたのは！

シルヴィア

すみません、マンドス様、でも思い出されたことの中に一つお忘れになっていることがありますように思えます。それをあなたに思い出させることは私の義務だと思うのです。

マンドス

なんでございましょう？

シルヴィア

あなたの奥様のことです。

マンドス

レオノールのことですか？

シルヴィア

ええ、でもあの方はお忘れになるというような侮辱を受けるにはふさわしくない美しいお方でしたわ。

マンドス

おお、分かっていただけたら…

シルヴィア

何をですか？

マンドス

お伝えすることができましたなら…

シルヴィア

お話し下さい。

マンドス

いえ、いえ、できません！

シルヴィア

無理にとは言いません、マンドス様、あなたの秘密でいらっしゃるのですから。

マンドス

いえ、私の秘密は追放によるものです。しかしあなたは、奥様、追放の身でもなく、身を隠したり、名前を変えたりなさる必要はございません。あなたがどなたであるかを私にお隠しになる理由は…

シルヴィア

全くございません。私の人生はあなた様のように謎めいてはおりませんもの。22 歳の寡婦で…

マンドス（傍白）

寡婦とは！

シルヴィア

自分の財産を持っており…

マンドス

ああ、そんなことはどうでもいいですが。

シルヴィア

少々人を楽しませる才能がある、と言ってくれる人があります。

マンドス

魅惑的です！

シルヴィア

過剰に小説好きで、新しいモードに目がなく、からかい好きで、薄っぺら、物を気にせず、かつ愛したことがなく、この先愛したい気持ちもなく、あなた様に偶然再会しましたがまたお会いしたいとは思わない…

マンドス

おお！奥様…

小間使い

奥様

シルヴィア

なんなの？

小間使い

輿にお乗りの大貴族の方が一人お見えです。

シルヴィア

留守です。

マンドス

私にはお会いになられたのに。

シルヴィア

とんでもない。あなたにも誰にも同じです。留守なんです。私はみんなが嫌いになったので、人間嫌いに思う存分ふけるために閉じこもるのですわ。

(部屋から出て扉を閉める)

第4場

マンドス (独白)

私を愛しているのだ！あの不機嫌は嫉妬に他ならない。ああ、すべて言ってしまうことができたならなあ。いやいや、そんなことができるはずがない。不用意な一言で私たちが誰だか知られてしまう。ああ、遠からず遠慮なく言える時が来ればなあ。でもⁱⁱ、あのようにな命じられたのに入ってくるやつがいる。なんたる傲慢さだろう！

第5場

マンドス、ピキヨ (輿に乗った貴族の格好で)、小間使い、従僕たち、輿の人足たち

【歌】

合唱

貴族の殿に

弥栄

豊かなお財布で

大盤振る舞いをなさる

貴族の殿に

弥栄

弥栄、弥栄、弥栄

ピキヨ

静かにせよ、下郎ども、静かに

わしのような身分の者の

気前の良さに驚くのもほどほどに

しかり、わしの財布は詰まっておるが

わしの杖もまたしっかりしておる

わしがこれで打つときもまた

大盤振る舞いなのじゃから

合唱

貴族の殿に、以下繰り返し。

【台詞】

小間使い

でも旦那様、奥様はどなたにもお会いにならないと申し上げましたのに。

ピキヨ

それは間違いじゃて、ねえ君。この方にお会いになられたのじゃからの。奥様にドン・アルフォンス・オリフェルノ並びにフエンテス並びにバダホス並びにリオレスじゃと申し上げてくれ。ⁱⁱⁱ（マンドスに近寄って）おや、おや、騎士殿、我らは二人とも同じ方をお慕いしていると見える。優先権の問題に関して何かもめごとが起こりそうじゃの。

マンドス

それはお間違いでございますね。私はシルヴィア奥様をほとんど存じ上げておりませんし、貴公の権利はおそらく私の権利より古く、より確かなものでありましょう。

ピキヨ

私の権利については申しますまい。貴公の権利は、今現在明白でござる。貴公は最初にいらした。

マンドス

でも私はこれから退出いたし、場をあげわたします。

ピキヨ

私は順番をお願いしただけなのに、貴公はそれを明け渡してくださる。ずいぶん冷めた崇拜者なのか、あるいは臆病な訪問者なのですか。貴公の関心の薄さに感謝すべきなのか、あるいは礼節の強さにですか？

マンドス

騎士殿、貴公がどちらの地方の方かは存じませぬがこの館でお目にかかるには極めて驚くようなある種の軽さが貴公の言動にほの見えるようです。われわれカスティーリャの者は奥方の館でお目にかかるような敬意を払うべき人物に対してうっかりした言葉を漏らすようなまねはせぬのです。

ピキヨ（鏡の前で服装を整えながら）

ああ、貴公はマドリッドの方ですか？私はあそこから来たばかりですが、あそこを出るころにはかの地では大事件が色々起きたようすな。

マンドス

大事件ですと？（傍白）おそらく私とドン・ファブリスの件だ。

ピキヨ

まずは私が履いているような長めでゆるく垂れているような半ズボンを着るようになったことです。貴公がまだ着ているような膝でボタンをかけるようなタイプではなくです。それからヴィラフロール伯爵夫人が闘牛士のヌニェスを愛人にしたために王立劇場の女優たちがかまびすしく非難の声を上げていました。最後に、美女中の美女、スペインのダイヤモンド、明けの明星、この館の女神であられる美しいシルヴィアが誰にもどこへ行くとも告

げずにマドリッドから消えてしまったこと。かくしてその失踪の翌朝にはマドリッドの最も上品な社交界に開かれていた彼女のサロンが閉じられているのを発見するありさまで、町にはすんでのところ大暴動が勃発するところでした。

マンドス

わかり申した。一つ頼まれていただけませんか？

ピキヨ

喜んでお役にたちましょう、お若い方。

マンドス

それでは私からだと言ってシルヴィア様にこの首飾りをお渡しくださいませ、私が自分でお渡ししようと思っていたのですが、そしてもはやお目にかかることもございませんとお伝えください。

ピキヨ

なんですと、この私にこの首飾りをお預け下されると、本当ですか？

マンドス

貴公は貴族であらせられるのでしょうか？それに奥様の友人でいらっしゃる…

ピキヨ

確かに。しかしなんて素晴らしい首飾りだ。最高の純度のダイヤモンドのものだ。ピアストルでもマラヴェディでも1万貨幣の値打ちがある。全体どこでこれを盗んだのかね？

マンドス

なんということを！

ピキヨ

失敬、失敬、これは時々癖のように口走ってしまう意味のない言葉です。それで私にこの首飾りをお預け下さるのですね？

マンドス

私のお頼みをお断りになられるのでなければですが。

ピキヨ

とんでもない。喜んでお引き受けいたしますよ。でもどなたからと言えはよろしいので？

マンドス

ドン・ディエーグ^{iv}からです。

ピキヨ（傍白）

おや、例の男だ！（マンドスに）それで貴公はもう二度と奥様にお目にかからないと言われるのですな。

マンドス

私は今日セヴィーリャを離れますから。

ピキヨ（傍白）

しめた！こいつは知ってよかった。（マンドスに）今日セヴィーリャを離れるのですね？

マンドス

そう誓いましたから。

ピキヨ

恋人の誓いですか！

マンドス

貴族の誓いです！

(退場)

第6場

ピキヨ (独白)

大変、大変それなら一刻も無駄にできないぞ。このことをドン・ファブリス様にお知らせしなくちゃ。ペンとインクは、と、ああ、あった。(書きながら)「拝啓、ドン・ディエーグ様は今日セヴィーリャをお発ちになります。したがって今夜に予定されていた拉致はよろしければお早め下さい。部下たちをブルゴス街道へご派遣ください。一時間後には私も参ります。」(ベルを鳴らすと、従僕が一人入ってくる。)この手紙を友人のドン・ファブリス・ドリヴァレスに届けてくれ、3日前にマドリッドから着いてアルカザール通りの太陽ホテルに泊まっている。さあ、これはチップだ。(首飾りを自分のポケットに入れる。)さあ、ピキヨよ、もし幸運が続いてくれれば、王侯のような財産を持って泥棒家業から足を洗えるぞ、それにとりあえず貴族のようなあらゆる楽しみを味わいながらだ、今までのところはな…

【歌】

アリア

しがない身分のこの俺が、哀れなピキヨが、
抜け目のなさを發揮して
見事なお宝を勝ち取るのさ
高貴な騎士や勇猛な郷土殿より豊かにね
高貴な婦人をいいなづけにしてさ
なにせおいらが いい宝石を
いい家のボンボンが身に着けているのを見たら
首飾りだろうが金の鎖だろうが、おいらの首に
夕方にはもう輝いていると来たもんだ
しがない身分のこの俺が、以下繰り返し
そうしてもっと尊い宝と言える
気の強い美女に出会ったなら
鎖か金の首飾りをかたに
その唇から接吻を盗むのさ
そうさそうやって、哀れなピキヨが
抜け目のなさを發揮して

見事なお宝を勝ち取るのさ
高貴な騎士や勇猛な郷土殿より豊かにね
高貴な婦人をいいなづけにしてさ

【台詞】

ああ、そうとも、お立合い、しがな身分の孤児、おそらくは貴族の落し種、王侯の、ひょっとしたら王様の落し種、いずれにせよ間違いなく身分ある生まれさ。そいつは手を見ればすぐ分から。つかむことも与えることもできる手だ。こいつが金をせびったり、袖を引いたりすることしか知らぬ平民の手などであろうかい。(シルヴィアの化粧台に身を映しながら) 諸君、お立合いおいらの貴族の称号や先祖代々の宝石や貴族の衣装や貴族の顔立ちは盗んだものかね？おいらはフエンテス並びにバダホス並びにリオレスの領主じゃないのかね！ふん！どうもここにはなんだかピキヨとかいうおどけ者がいておいらを嘲笑するようだ。このピキヨという奴、ろくでなしで、俺の従僕、俺の管理人、俺の執事、それにしてもきちんとした男で、俺の収入や領地を管理している、ただ神のはからいでそういうものが社会のあちこちに散らばっているわけだ。役に立つ男なのさ、このピキヨは。奴が財布にため込んで、俺がそいつを空にするんだ。とはいえ奴が傲慢なそぶりを見せたら追い払ってやる。しかしあの美女はずいぶん待たせるな。おいらのことを誰か別人と勘違いしているんだ。おーい、召使たち、来てできるだけ早くもう少し余計にクッションを持ってきてくれ。それに俺の右足を乗っけてレースを皺にしないようにするんだから。(クッションが運ばれてくる。)『それで、娘さんたち、少し扇いでくれるとありがたいんだがな、できれば私の髪形を乱さないで、とりわけ耳飾りを損なわないようにな。(侍女たちはそれに従い、飲み物を運んでくる。) マラガ酒か！ああ、なんていい考えだ！そらこれはチップだ。

【歌】

合唱

貴族の殿に
弥栄
豊かなお財布で
大盤振る舞いをなさる
貴族の殿に 以下繰り返し

第7場

座っているピキヨ、シルヴィアが入ってきて従僕たちに出ていくよう合図する。ピキヨは立ち上がる。

【台詞】

シルヴィア

そのままでどうぞ、あなた様が我が家であなた様の身分にふさわしくつろぎ方をなさっているので満足ですわ。

ピキヨ

ああ、たとえ私が玉座にありましようとも、奥様あなたがおいでになるのを見た瞬間から私のいるべき場所はあなたの足下でございます。

シルヴィア

それほど高い身分の方をそのような姿勢のままに置くなど私にはできません。とはいえ、まだどのような称号でごあいさつ申し上げたものかわかりません。あなた様のお顔は存じ上げませんし、どうもマドリッドの方ではございませんようですから。

ピキヨ

拙者はドン・アルフォンス・オリフェルノ並びにフエンテス並びにバダホス並びにリオレスと申すもの、メキシコ副王の第三子でございます。スペインの宮廷の風に当たりたく、また少々メキシコの風をもお持ちしたく参上しました。当宮廷の方々が趣味のよい方だとしてのことですが、私のお供をご覧になりましたか？

シルヴィア

あまりににぎやかに来られたので窓からのぞいて見ないわけにいきませんでしたわ。

ピキヨ

あなたにご栄誉を与えるべく拙者の命じたものです。

シルヴィア（傍白）

おやおや変わったお方なこと。（ピキヨに）ドン・アルフォンス様、それがメキシコで当節流行のご衣裳でございますか？

ピキヨ

そしてまた、マドリッドでの最初のものとなると希望しております。私どもはお国の流行を追うのではなく、先を行っておりますので。ですが、あなたのことをお話ししましょう、ヨーロッパの美しい星、オリエントの美星であられる奥様。お分かりですか、奥様は私に先祖たちの道を逆にたどらせているのですよ。彼らは宝を探しにスペインからアメリカに行った。拙者はアメリカからスペインに来て宝を発見し申した。

シルヴィア

おや、これはまたお見事な趣味の告白で、場にふさわしいですこと！新世界の機知の巧みさがわかりますわ。

ピキヨ、剣の柄飾りを見せながら

この飾りをどう思われますかな？

シルヴィア

質の良いものならさぞお高いでしょうね。

ピキヨ

ふむ、父上はこんなものを馬のくつわ鎖に使っておりますのですが、拙者は当地の貴族たちを辱めないようにこうした使い方をしておるのです。さて、あなたの崇拜者を知っていただけなら、奥様の魅力に憧れるつたない者として、リボンの結び目をすべて奥様の色に変

えることを許していただけませんか？

シルヴィア（傍白）

間違いだったわ。間抜けだったのね。（ピキヨに）それには一つ困ったことがありますのよ。私は毎日違う色を身に着けるんですの。

ピキヨ

拙者毎晩奥様の翌日の気まぐれの色を付け申そう。

シルヴィア

お気をつけ遊ばせ！私は毎朝崇拜者も取り替えますのよ。

ピキヨ

拙者がいの一にまかり越し申したならば拙者の番とさせていただきます。

シルヴィア

いえ、だめですの、オリフェルノ様、あなたより先に登録された方がいらっしゃいますの。

ピキヨ

長いことなのですか？

シルヴィア

永遠にですの。

ピキヨ

気まぐれでしょう。

シルヴィア

愛ですの。

ピキヨ

おお、感情ってやつですな。

シルヴィア

それ以上です、情熱なのですよ。

ピキヨ

それじゃあ、望みはございませんのですか？

シルヴィア

全くございません。

ピキヨ

ああ、せめて芸術の神と誘惑の乙女たちの名にかけてスペインが素晴らしい噂を言い立て、我が国がスペインを羨んでいる奥様の甘美なお声をお聞かせいただけませんか。

シルヴィア

ご容赦あそばして、今声が出ませんの。

ピキヨ

それだけのことですか？それにはお手当てがございます。

シルヴィア

お医者様でしたか？

ピキヨ

魔法使いなのです。

シルヴィア

処方をお持ちだと？

ピキヨ

護符を持っております。

シルヴィア

どのようなものか試してみたい気がしますわね。

ピキヨ

おやすいご用です。顔をおそむけになって腕をお出してください、ほら。(腕輪をはめる)
この腕輪をご覧になればすぐとお声は戻りましょう。

シルヴィア

この腕輪、(じっと見て) なんていうことかしら？

ピキヨ

如何です？少し良くなったのではございませんか？

シルヴィア

ええ、ええ、もう、(傍白) 間違いない、これは私のだわ。どうして昨日盗まれた宝石が
このお方の手にあるのでしょうか？

ピキヨ

少し声を試して見られては？

シルヴィア (傍白)

どうなることか、様子を見てみましょう。(歌う) アー、アー、アー、アー、(咳をする)
ちょっと引っかけりますわね。

ピキヨ

そんなことが！

シルヴィア

治療がきちんとするためには必要な気がします。

ピキヨ

何が必要なのでしょう、魅惑の君よ。

シルヴィア

対になる腕輪がいるのです。お持ちですか？

ピキヨ

それはありますが…

シルヴィア

素晴らしい宝石ですこと！メキシコ産ですか？

ピキヨ

奥様のために特別に作らせたものです。

シルヴィア

ご自身ですか？

ピキヨ

私自身が作らせたものです。

シルヴィア（傍白）

間違っていたわ。変わり者でも間抜けでもなくて悪党だったのね。

ピキヨ

それでお声は？

シルヴィア（もう一方の腕を差し出して）

それが戻るために必要なものを申しませんでしたかしら。

ピキヨ

おお、それは少し要求が高すぎはしませんか。お歌いになってからということで。

シルヴィア

それではバラードをやりましょうか。（侍女を呼ぶ）パキータ！

ピキヨ

何かいるのですか、奥様？

シルヴィア

ギターですの。（パキータに）代官にお知らせして、すぐにいらっしゃるようにと。

パキータ^{vi}

ここにですか？

シルヴィア

ここにです。さあ行きなさい。

ピキヨ

伴奏いたしましょうか？

シルヴィア

ぜひお願いしますわ。これから歌うのは「盗賊の妻」という題ですの。

ピキヨ

ああ、その曲なら存じております。

【歌】

シルヴィア

スペインの国で
嘆きの声が上がる
そは山の中
哀しい盗賊の

悲しい連れ合いの声
「ああ、愛する者のため
いつでも嘆かなくてはならないなんて
本当に心の底から
危険を恐れなくてはならないなんて
帰ってきて、ペプロ、
帰ってきて、ペプロ！

答える声がする、こだまなのだろうか？

「お馬鹿さん、
嘆いているのかい
彼方の危険を
お前の取りこし苦勞も
明日には消えるさ
愛を信じて、強い心でいてくれ
晩にはお前の分け前を
どっさり持って帰るから
そのお宝で
作るといいさ
ガラスの首飾りを
金の縫い針を。」

彼方、野の方で ^{vii}
驟馬引きが行く、
悲しみの女が
息を切らせて
道を降りて来る
「あんた、そこに行く人
「あの人が来るのを見た？
「言ってよ、お願い
「死ぬか生きるかなの。」
なぜ死ぬなんて言うのさ？
なぜ死ぬなんて言うのさ？
今夜こそ、今夜こそ、彼は戻って来る

「お馬鹿さん、
嘆いているのかい

彼方の危険を
お前の取りこし苦労も
明日には消えるさ
愛を信じて、強い心でいてくれ
晩にはお前の分け前を
彼がどっさり持って帰るから
そのお宝で
作るといいさ
ガラスの首飾りを
金の縫い針を。」

山のふもとで
泣きぬれた女が
晩に、野に出て
仲間たちからも離れて
悲しんでまた嘆く
耳を澄まし、名前を呼ぶが
愛するその心には
盗賊の歌は
もう答えはしない
もう答えはない
あの彼方からの
朝の歌は

合唱
「お馬鹿さん、
嘆いているのかい
彼方の危険を
お前の取りこし苦労も
明日には消えるさ
愛を信じて、強い心でいてくれ
晩にはお前の分け前を
どっさり持って帰るから
そのお宝で
作るといいさ
ガラスの首飾りを

金の縫い針を。」

(代官が警吏たちを従え、シルヴィアの召使たちと入って来る。)

第8場

シルヴィア、ピキヨ、代官、警吏たち、シルヴィアの召使たち

【台詞】

ピキヨ

ブラヴォー！ブラヴォー！素敵な歌いぶりですね。でも、終わりは歌わないのですか？

シルヴィア

仕方ないでしょ。盗賊がどうなったかご存知？

ピキヨ

死んだのですか？

シルヴィア

いいえ、捕まったのです。(代官に) 代官様、良くいらっしゃいました。

ピキヨ

ああ、哀れなおいら！

代官

お呼びいただいたそうで、奥様。

シルヴィア

ええ、代官様。ご紹介します、ドン・アルフォンス・オリフェルノ並びにフェンテス並びにバダホス並びに…

ピキヨ

リオレスでございます。

代官（お辞儀して）

これはこれは！

シルヴィア

第二子か、第三子だそうです。

ピキヨ

その通りです。

シルヴィア

メキシコ副王の。

代官

殿下！

シルヴィア

ご尊父はささやかなお楽しみとしてグアダラハラダイヤモンド鉱山をお贈りなさいましたの。

代官

これはこれは、殿下！諸君、敬礼だ、敬礼しなさい。

シルヴィア

この方が、私にとって幸いなことに昨日ドン・ディエーグ様のうちにお預けしておいた宝石を盗んだ悪党を発見してくださったのですよ。

代官

それは又！

ピキヨ

ええ、まあ偶然のことですが。

シルヴィア

そういうわけでオリフェルノ様が宝石を取り返してくださいまして。

代官

彼奴目は抵抗しましたか？

ピキヨ

ええ、抵抗したかったようですがね。

シルヴィア

でもそ奴も自分より強くて抜け目のない相手だと分かったのです、そうですね？

ピキヨ

確かに。

シルヴィア

そういうわけでそ奴はあなた様に引き渡したのですね？

ピキヨ

ええ、この腕輪を。

シルヴィア

首飾りも持っていたはずですが。

ピキヨ

首飾りですと、いいえ、覚えがありません。

シルヴィア

おや、よく思い出してご覧あそばせ。

ピキヨ

はい、はい、確かに。忘れておりました。これです、奥様。

(ドン・ディエーグの首飾りを渡す。)

シルヴィア

すみませんけどこれではございません。でもこれは、間違いでなければドン・ディエーグ様のものです。

ピキヨ

そうかもしれません。

代官

それにしてもそ奴は宝石狂いなのですな。

ピキヨ

奴は宝石が大好きという弱みがあるのですよ、代官様。目がないのです。

シルヴィア

でも結局自身の安全と宝石への愛という板挟みになれば。

ピキヨ

御覧のように手放さなくてはならないわけです。

シルヴィア

しぶしぶですわね！というのも私の首飾りは…奴の手から取り戻すのに御苦労なさいまして？

ピキヨ

奥様、奴は一つ告白したことがありますして私はそれにいたく感動したのです。つまり奴は一人の美しい女性に恋をしまして、いつも着ているような粗末な衣装ではお目にかかれなものですからその運の悪い首飾りを最新流行の趣味のいい衣装、この衣装のような、ですな、それと取り替えなければならなかったというのですよ。それですから、考えますに、思いますに、希望しますに、お心寛くお許し願えればということなのですが…

シルヴィア

ああ、それはもう。

代官

それで、その悪党の名前は何というのですか？

ピキヨ

奴は言わない方を選びましたので。

シルヴィア

おや、でもお分かりになったんじゃないやありません？ピキヨとかいう奴だったんじゃないやございませんかしら？

ピキヨ

ええ、そうそう、確かにピキヨでした。

代官

それじゃあ拙者の間違いではござりませんでしたな。

ピキヨ

代官殿は奴をご存じなのですか？

代官

評判の奴ですからな！拙者はポケットに手配書を持っております。

ピキヨ

ひょっとして人相書きなどもございますか？

代官

残念ながらそれはございません。

ピキヨ（傍白）

ふう！助かった。

代官

されど貴殿は奴にお会いになったわけだから、どうか人相を教えていただければありがたいのですが。

ピキヨ

難しいですな！奴を見たのは夜だったので、あまりよく覚えておりません。

シルヴィア

お手伝いしましょうか、オリフェルノ様。

ピキヨ

かたじけないが、必要ござらん。思い出しました。

【歌】

掛け合いの歌

代官（メモを取りながら）

当局に教えていただけるということなので

お聞きします。お始め下さい。

ピキヨ（傍白）

如何に疑いをかわそうか？

（代官に）

考えさせてください。

代官

まず初めに

どのような立ち居振る舞い

様子だったか？

ピキヨ

様子ですと？

代官

いかにも、風采というか

容貌というか。

ピキヨ

結構結構、奴は、ですな

立派な風采で

シルヴィア

貴族の風采、

大人物のような恰好をしているということですね。

ピキヨ（傍白）

俺を困らせようというのか？

シルヴィア

大貴族のような恰好をしているらしいです。

代官

それではどうか

奴の背格好は？

シルヴィア

噂では奴は

痩せてほっそりとしているとか。

ピキヨ

なんて間違い！大男です。

もしも絞首したら

綱が切れるでしょう。

代官

書き留めましょう、大男と。

そうだと思いますよ、こういう盗賊が

小さいわけがない。

おそらくきっと醜い奴でしょうな。

ピキヨ

いえいえ、違います。大男ですが

押し出しのとても良い男で。

代官

押し出しのとても良い男、と。

ピキヨ、傍白。

ああ、何とか隠しておきたいけれど

肖像をあんまりひどくゆがめるのには

ほんとに、抵抗があるんだよな。

ピキヨという名の名誉にかけて

間抜けな風には致すまい。

代官

奴の風貌は？

シルヴィア

普通だそうですよ、

ごく普通の。

ピキヨ

いえいえ、反対にとっても良い男でした。

代官

その額は？

ピキヨ

大変秀でたもので。

代官

その眼は？

ピキヨ

大変青く

鼻はしゃくれていて、口元も心地よく

代官

髪の毛はどうです？

シルヴィア

黒髪ということですよ。

ピキヨ

黒髪？いえいえ！（傍白）なんてこと！

おいらの髪の色じゃないか。

（声に出して）

髪は…赤です！

シルヴィア

何ですって？

いい顔じゃありませんわ。

ピキヨってひどいご面相なんですね。

ピキヨ

むしろ金髪くさい…としておいてください。

代官

結構…金髪くさい、と。

ピキヨ

お待ちを、奴の髭の色を

お伝えしなければ

地獄のように黒いのです。

代官

地獄のようですって！

シルヴィア

はっきりしない人相書きですわね。

赤毛なのに口髭は黒

目の色ときたら青とは！

仰せの通りだとしたら

ぞっとするような男だわ。

ピキヨ

いえ、奥様

誓って奴は大変見栄えのいいやつです。

私のまなこを信じていただかなくちゃ。

堂々とした風采

眼光鋭く、愛想のよい顔立ち

心地よい金髪で

鼻は高く、額は広く

口髭の黒さと言ったら

晩にプラドの広場で

大言壮語する男のよう

シルヴィア

でも、あなたの描くところでは

ピキヨってひどいご面相じゃございませんか。

ピキヨ

いえ、すべて恰好のいい男です

本当ですよ。

とても見栄えのいい騎士なのです。

合唱

代官

ああ、感謝し奉る

おかげで分かり申した

見分けて捕まえることができます

悪党を。

警吏たち

お殿様、感謝し奉る

おかげで分かり申した

見分けて捕まえることができます

なんと律儀な紳士、模範的市民でいらっしゃる

ピキヨ

いやなんの、いやなんの。

司法に情報を与え
警察に知らせる

これすべての良き市民の務めですからな。

シルヴィア

結局のところ
うまく切り抜けましたこと、
その悪党は
堅気の男より気が利いている。
実に、うまく切り抜けましたこと。

(彼らは大いに感謝の念を示してピキヨを輿のところまで送り、退場。)

第9場

シルヴィア、あとから小間使い

【台詞】

シルヴィア

やっと帰ったわ。この予想外の騒ぎの中で、お化粧にかけられる時間が見つけれられるとい
いんだけど。^{viii}

小間使い

奥様、ドン・ファブリス様です。

シルヴィア

お通しして下がっておくれ。

(小間使い退場)

第10場

シルヴィア、ドン・ファブリス

ドン・ファブリス

ごきげんよう、美しい魔女さん、魔法のかけ具合はいかがでしょうかな？

シルヴィア

御覧の通り、準備の最中ですよ。

ドン・ファブリス

その様子からするとあまり進んでないというわけですか？

シルヴィア

進みましたわ。彼が来ましたもの。

ドン・ファブリス

それでまた来るわけですか？

シルヴィア

誰のためにお化粧しているとお思いなの？

ドン・ファブリス

さて、シルヴィア、心配があるんですね。

シルヴィア

心配ってどんなのですの？

ドン・ファブリス

あなたをご自分のことにかまけて私の心配事をお忘れになっているんじゃないかということです。

シルヴィア

同じ心配事なんじゃありません？

ドン・ファブリス

でも、私は恋しているのです。

シルヴィア

それで、私は愛しているのです。

ドン・ファブリス

あなたがですか？シルヴィア。おおこれはまた巧みな男だ、僕らみんな師匠にしたいくらいだ。24時間のうちにドン・アンリックやドン・パエスが6か月かかったよりも進んでしまうなんて。

シルヴィア

実は私ドン・ディエゴ様をずっと前から存じていましたの。そういうこと。

ドン・ファブリス

ご存知とおっしゃるのですか？

シルヴィア

そうなのです。ファブリス。あなたは本物の恋にさらされていなさるから、あの若い愚かな人たちには閉じてしまっている心も開くことができますわ。そうなんです、私はあの人をずっと前から知っていて愛しているんです。その愛こそが私にマドリッドを去らせ、あそこで暮らしていた快樂の日々を断念させたんです。セヴィーリャでまた彼を見つけました。探してはいなかったのですが、彼に再会したらそれまでいつも退けていた望みが私をとらえた、彼に愛されるという望みです。あなたのお役にたつという上辺を持った計画が浮かび、浮かぶとすぐ実行されました。昨日再会し、今日もまた再会したのです！

ドン・ファブリス

それでどうなったのです？

シルヴィア

それで、ファブリス、私は女の中で最も幸せなのかさもなくば最も不幸なものなの。なぜなら私は彼と一緒にいられないのですもの。ファブリス、彼は私を愛しているんです。

ドン・ファブリス

愛しているって？彼があなたにそう言ったのですか？

シルヴィア

いいえ、でも間違いないわ。声の調子も、まなざしも、言葉さえも…

ドン・ファブリス

あなたに戻ってくると約束したのですか？

シルヴィア

私が彼を待っているのが分かるでしょう？

ドン・ファブリス

かわいそうなシルヴィア！

シルヴィア

なんですって？

ドン・ファブリス

だってドン・ディエーグはいましもセヴィーリャを去ろうとしているのですよ。

シルヴィア

ドン・ディエーグがセヴィーリャを去るって？本当にそう思っているの？

ドン・ファブリス

確信しています。

シルヴィア

平気な顔でおっしゃいますのね。

ドン・ファブリス

僕は用心をしておきましたから。

シルヴィア

どんな用心ですの。

ドン・ファブリス

いいですか、シルヴィア。僕は感謝を忘れない男です。意図としても。あなたは夫を遠ざけて妻を僕に任せてくれると約束した。それで僕はレオノール^{ix}を遠ざけてドン・ディエーグをあなたに残すんです。

シルヴィア

何を言っているの？

ドン・ファブリス

僕の命に服す 6 人の男が、スペインで一番巧みな悪党に率いられてここから遠くないところで待ち伏せをしているのです。

シルヴィア

その人たちが決行すると？

（ピストルの音が一発聞こえる）

ドン・ファブリス

そら、奴らのあいさつが聞こえた。

シルヴィア

ああ、神様！あの人をお守りください！

ドン・ファブリス（笑って）

ご心配なく、シルヴィア、彼には最大限敬意を以て扱うよう指示しておきました。

シルヴィア

ああ、あなたはひどいこと、恐ろしいことをなさいました。

ドン・ファブリス

いったいどちらへいらっしゃるのです？

シルヴィア

わかりません、あの人と殺し屋の間に入ってあの人を守るつもりです。

ドン・ファブリス

馬鹿なことを、シルヴィア。彼らは殺し屋ではありません。

シルヴィア

放してください。

ドン・ファブリス

誰か来る。間違いない。ドン・ディエーグだ。

シルヴィア

ドン・ディエーグですって！

ドン・ファブリス

さようなら、シルヴィア、私には妻を…あなたには夫を！^x

第11場

シルヴィア、マンドス

マンドス

ほかに人はおりませんか？

シルヴィア

おりません。いかがいたしました？

マンドス

あまりにも異様な出来事が私の身に降りかかりましたので、私はもはやあなたに再びお目にかかるまいと心に誓ったのですが、しかしここは、説明していただけるただ一人の方に説明を求めなければなるまいと思ったのです。私の馬車を止めてドニャ・レオノールを拉致しようとした盗賊たちの中に、というのはいいですか奥様、あれはまさに武装しての拉致だったのですから、さてその盗賊の中に今朝お宅で見かけた男がいたのです。どこでその男を見つけることができますでしょうか？彼の名は？住所は？

シルヴィア

存じません。誓ってあの男を見たのは初めてのことでした。

マンドス

しかし奴の方はあなたをよく知っていた！

シルヴィア

あの男がそうあなたに言ったのですか？

マンドス

あなたのことはなんでもですね。いや、今問題なのは私の愚かな恋のことではない。レオノールのことだ、妹のことが問題なのです。

シルヴィア

妹さんですって！レオノールは妹さんだったのですか？ああなぜそうおっしゃらなかったのです！今朝そうおっしゃっていただけたなら！

マンドス

なぜです？

シルヴィア

今朝ならば妹さんをお救いすることもできたのに。

マンドス

それではすべてご存じなのですか？後生ですから、お話し下さい。

【歌】

2 重唱

シルヴィア

お許しを、お許しを

責めないでください、お膝にすがります。

マンドス

私の膝に！そんなことをしてはいけません。

お立ち下さい。奥様、お立ち下さい。

シルヴィア

どうかお願いですから

お聞きください。すべてお話しします。

私の過ちを、すみからすみまで

昨日愚かな賭けをしました

あなたの愛を

一日で勝ち取ると

ああ、今や私のあだなたくらみに

私は十分に罰せられたのではないのでしょうか？

お膝にすがっておりますのに

あなたはお退けなさいますのね。

二人で

マンドス

でもお話にならないじゃないですか

妹の拉致については

あなたの心からの声を信じれば

誰が拉致したのかご存じのはずだ。

シルヴィア

ええ、陰謀に加担しておりました、そして今しも

ドン・ファブリスはこの地を去ろうとしています。

マンドス

ドン・ファブリスだって？結構、失礼します。

奴のとんでもない傲慢さを罰しに行ってやる。

かたじけない、奥様。

シルヴィア

いいえ、私が…

ドン・ディエーグ、お願いします。

私が行きます。ああ、このように恐れておるのです。

マンドス

いえ、私への恥辱です。復讐するのは私。

お放してください、奥様、お放してください。

シルヴィア

もし1時間後に妹さんがあなたのそばに戻らないなら

神の罰を受けて、死にます、

懺悔も支えてもらうこともなく。

マンドス

そんなことより、奴のそばに連れて行ってください。

シルヴィア

いいえ、それはできません。

あなたの恐ろしいお心が

あまりに怒りに満ちているのですから。

そして今この時まで

ああ、もう私はどれだけ血が

流れたかと思って涙するのです。

マンドス

このような侮辱は償えない

私の勇気が

その復讐を果たすか
私から隠れている
卑怯な奴が
レオノールを返すかでしか

シルヴィア

私が彼女をお返しします。

マンドス

いいや、それを待つてはいられない。

シルヴィア

後生ですからここにいてください。

もしも私が彼女を連れて帰ってこなかったなら

ああ、あなたの憎しみは

私をこそ罰して下さい。

(シルヴィアは扉の前に膝をつき、マンドスはそれを踏み越えられない。)

ⁱ R. (侍女たちを去らせる)

ⁱⁱR. 手紙を書いたらどうだ？ そうだ、それが唯一の手段だ。おや何だ？

ⁱⁱⁱ R. さあ行け。(召使たちは退場、

^{iv} ドン・ディエーグとドン・ディエゴは混在して使われている。

^v それで、から場の終わりまで R にはない。

^{vi} R ではここはピキヨのセリフになっている。

^{vii} R ではここからの 2 連がない。

^{viii} M ではここに次のような一連のセリフが入る。

(呼びかけて) ペピッタ、ペピッタ。

小間使い (入りがてら) 奥様？

シルヴィア この鏡を近づけて髪を梳かしておくれ…きれいにしなくちゃいけないの、分かる？

小間使い 奥様の思召しのままです。

シルヴィア 何を着たらいいかねえ？

小間使い このバスク風スカートならとてもお似合いです。

シルヴィア でも宝石は？

小間使い ダイヤモンドはいかがです？

シルヴィア それはもうあの人は見ているからね。

小間使い 花になさいますか？—

シルヴィア そうだね。

小間使い 彼に焦がれ死にをおさせになりたい？

シルヴィア いえいえ、彼には生きて欲しいの。

小間使い もし首ったけにならないようなら、ずいぶんと恩知らずな方ですわ…

シルヴィア お聞き、ドアを叩く音がするわ。

小間使い ファブリス様です。

シルヴィア お通しして、下がっておくれ。

^{ix} **R** では、妻を遠ざけて夫を残す。

^x **R** では、それぞれ仕事にかかりましょう。最初に成功した方がもう一人に知らせることにしましょう。(退場)